モリ　カ ルソン 米国出身の元キリスト教徒（上）

：

明:彼女の求めていたものは、既に彼女の中の大きな一部でした。それはイスラ ムだったのです。

目: 事新改宗者ムスリムの逸 女性

より: モリ　カ ルソン

日06 Apr 2015

集日 06 Apr 2015

それは非常によく えています。私の人生が わったその瞬 です。「もしムスリムになったら」とはもう考えてはいないことに 付き、ある 期から「いつムスリムになろうか」と思い始めていました。それは既に　肢ではなくなっていました。それは必然だったのです。

そう 感したときは、まるで冷水を浴びせられたかのようでした。それは、外出先で家に何かを忘れてきてしまったことに 付いたとき、ハッと息が止まってしまう瞬 のようでした。

その瞬 、私は自分がそうありたいと っていたアメリカ人女性ではもうなくなっていること、そしてそれはもうずっと前から いていたことに 付きました。雪の上に反射していた太 、私の前に いていた道路、そして自分がどこに向かって　していたのかを一瞬忘れてしまったことを思い出しました。私は怖れており、それは明白かつ疑いようのない恐怖でした。

その 感と自己の　は、十数年前から来るべきものでした。人々が　宗教が　私たちがムスリムなのは神の御意によるものだと言うとき、私はそれを疑いませんでした。しかし、信はあったものの、当 はそれが具体的には何なのかまだ分かりませんでした。

ただ、私は自分がそうではないことは何かを知っていました。私はいかに多くのアベ
マリアの祈りを捧げても、十字架を身に付けても、あるいは母が れて行った教会の集
会礼 に出席しても、カトリック教徒ではありませんでした。私を ませた疑 については
勉 し、祈り、最 的な について探索しましたが、それと同 に心の中の私は苦しみに喘い
でいました。

私の人生には 的な出来事や逸 、 人的な 、そしてそれを ている は全く不可解だった などがありますが、今 在知っていることと照らし合わせると、それらは腑に落ちることばかりなのです。

私にとっての最初のイスラ ムとの出会いは、マ ガライト ヘンリ 著の「名 の王」という本の形をとりました。それはモロッコ人少年と彼の子 との童 です。私は幼い から 烈な家でした。

それを んでいた当 、自分が何 だったかは思い出せませんが、少年がラマダ ン月に断食していた 面は 明に えています。私はこれが、真の自己の 醒であると 人的には思っていますが、その 数年 に渡りイスラ ムとの出会いがなかったことから、それは失われてしまっていました。

それを んだときの年 が8 だったと 定すれば、数年 の12 の 、私は全く意味のわからない 的な に まされました。それらは怖い ではなく、どちらかと言えば私が心の中で憧憬していたことについての潜在意 の反映でした。

一番良く えているものとしては、一方向にカ ペットの敷かれた完全に正方形な木 床材の部屋に立っているものです。そこには部屋を照らすための灯火がかけられていました。

私の左 には 刻のされた木 の仕切りがあり、その ろには の部屋がありましたが、 の中では女性が使っていた部屋ということは分かっていました。また、私が立っていた部屋は私のような女性が入ってはならない部屋だということも分かっていました。

私は男性部屋である、その禁じられた部屋に居ただけでなく、私の は覆われていませんでした。

12 のキリスト教徒の女の子として、私は男女 の部屋という概念、そして を覆う概念というのは文字通り たことも いたこともないものでした。しかしその の中では、何が っているか、そして何をすべきなのかが分かっていたものの、それがどうしてなのかは全然分かりませんでした。

その部屋に立つ私への慈悲深い神の 情と心遣いを感じましたが、同 に私は 造主であるかれを失望させたと感じました。その部屋の 刻を今でも けるほどはっきり えているものの、その において最も 明だったものは じらいと悲しみの感情でした。私はそれらをとても良く えています。

私が古 のドレスを着ていたことも えています。 の中でそこには入らなかったものの、女性用の部屋がどのように えたかも えています。私がヒジャ ブを着けることに い意 を感じるのはこの のためだと思っています。私が神がその10年 、私が行うべきことの を させてくれていたのだと感じています。

他にも、スンナの を一瞬目にするという、当 全く意味を解せない を たりもしました。その数十年 、おそらく私が改宗してから5ヶ月くらいが ぎた 、最 の が れたのです。それは予期せぬ光景だったため、 とはあまり言えないものでした。

それは丁度、改宗について冗 を言っていたムスリムの知り合いとの を切ったときでした。私はイスラ ムに敬意を持ってはいたものの、それを信じてはおらず、その否定のために克己 していました。私は自己の否定をとても恐れていました。しかし、神は なることをお考えだったのです。

を切ってしばらく ち、ベッドに横たわって目を じると瞬 に なる次元に移 しました。私の前には から爪先まで 装束で覆われた女性が立っており、 はまるで忍者のマスクのようなものを着けていました。それは彼女の の下半分を覆うベ ルでしたが、上の部分とは鼻と 目の を通る い でつながっていました。

私は心を われると同 に、ひどく恐怖しました。私は近づいてよく ようとしましたが、その瞬 、べ ルの人物が私自身であり、あたかも自分自身を で ているかのように、私にして「それ たことか」といった眼差しを向けていたのです。

私は恐怖に ずさりし、ベッドから び起き、持っていた受 器を投げ ばしてしまいました。私は怯え、 を受け、私の中のごく小さな部分は、それがそれまでの日常の わりであることを理解していました。そのとき、私は自分の未来の姿を垣 たことに 付いたのです。

この 事のウェブアドレス:

https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/2720

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。